

Title	羽入辰郎教授のマックス・ヴェーバー告発について
Author(s)	梅津, 順一
Citation	聖学院大学論叢,17(1) : 91-102
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=148
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

羽入辰郎教授のマックス・ヴェーバー告発について

『マックス・ヴェーバーの犯罪』⁽¹⁾を読む

梅 津 順 一

On Prof. Hanyu's Critique of Max Weber

Junichi UMETSU

—

最初から失礼を承知で言うと、私の見る限り羽入教授はかなり重症の「ヴェーバー病」患者である、いやあったというべきかも知れない。「ヴェーバー病」というのは、ヴェーバーを読んでヴェーバーの学問世界に引きつけられ、その重力圏からなかなか抜け出られなくなる精神状態を指す。これはヴェーバーの主張を支持するか、批判するかに拘わらない。どうも身動きが取れない状態になってしまう。私は国際基督教大学で大塚久雄教授に教えていただいたが、大塚教授は卒論の主題としてヴェーバーを選ぶことを勧められなかった。「ヴェーバーでは論文が書けなくなりますよ。」というのがその理由であった。それに「ヴェーバーは年を取らないとよく理解できませんよ。」という忠告も続いた。にもかかわらず、私は東京大学大学院経済学研究科に入学して羽入氏と同じくヴェーバーの『倫理』論文の周辺を手がけ、大塚教授の警告を身にしみて味わうことになるのだが、立場を異にするものの同病相哀れむというべきか、羽入教授に多少の親しみが湧かないでもない。

本書は羽入教授自身にとって、ヴェーバーの「魔術からの解放」、学問的自立、「ヴェーバー病」の克服過程ではなかったかと思うのだが、羽入氏にとってヴェーバー経験が不幸なものとなったのは残念である。というのは、羽入氏のヴェーバーへの最後の言葉は「犯罪」という烙印であるからに他ならない。ヴェーバーの論証は「知的誠実性」に欠けるといっただけならともかく、それだけでは足りずに「犯罪」とさえ言われる。「ヴェーバー病」患者が、長年のヴェーバー経験をそのように総括せざるをえないとすれば、お気の毒というしかない。ヴェーバー論文に関する文献的研究にこれだけ時間をかけ、克明に検討しながら、ヴェーバーは偽物だという結論では、空しいのではあるまいか。それとも羽入氏は反ヴェーバー十字軍の一兵士となることで充分満足なのであろうか。

私の場合は、ヴェーバーの『倫理』論文をピューリタン文献、とくにリチャード・バクスターを通して検討したのだが、お目出度いというべきか、結論はヴェーバーの主張は十分に根拠があると

Key words: 羽入辰郎, ヴェーバー, 天職

いうものであった⁽²⁾。そこで私が自覚的に行ったことは、ヴェーバーの議論をピューリタニズムという宗教的運動、その社会的事実と対応させて理解することであった。つまり、ヴェーバーのテキストがあり、ヴェーバーが根拠とするテキストがあり、そのテキストに照応する現実がある。ヴェーバーのテキストは、その現実を捉えることに成功しているのかどうか。その点に努めて注意を集中したのである。これは私なりの「ヴェーバー病」の克服方法であった。もとより、ここでは私の研究の当否を議論する場ではないが、私が羽入教授に違和感を持つのは、教授がヴェーバー・テーゼの事実的妥当性への関心を最初から放棄していることである。

たとえば、次のようにいわれる。「本書においては、ある特定の時代のある特定の地域の歴史的現実がいわゆるヴェーバー・テーゼと合致しているか否か、換言するならば、ヴェーバー・テーゼというものが何らかの歴史的現実当てはめることができるのか否か、ということを確認しようという試みはいかなる意味においても問題とはされていない。」では、何を問題としているかといえ、
「ヴェーバーは『倫理』論文においてそのテーゼを学問的に許されるやり方で構成したのか否かということを確認すること」のみだというのである。それも、「『倫理』論文のテキストとそこで引用されている資料との間で可能な限り厳密な照合を行う」ことで、ヴェーバーの「学問的手続きにおける「知的誠実性」」を問うというのである⁽³⁾。

確かに、これも一つの立場である。たとえば、医者がある患者を盲腸と診断したとして、当てずっぽうに「盲腸」と判断して間違っていないこともありうる。しかし、もしも医者が、血液中の白血球の数といった、基本的なデータを読み間違えているとしたら、その判断は医学の手続きを経っていないと批判することは出来る。羽入氏はヴェーバーのテキスト診断について、ごく初歩的な誤りを行っているという。それも一つや二つではない。「職業義務の思想」に関する聖書翻訳について、「資本主義の精神」に関するフランクリンのテキストについて、ヴェーバーは捏造ともいべきことを行っている。これが羽入氏の批判の主旨なのである。しかし、医者が誤診するという場合、どんなへボ医者でもデータの取り違えはそう多くないのではあるまいか。基本的なデータの取り違えを何度もやるようであれば、偽医者ではあるまいか。いや偽医者にもなれないのではあるまいか。ヴェーバーは偽学者の水準にも達していないのであろうか。

かつて毛沢東がアメリカ帝国主義を「張子のトラ」と表現したことがあった。結論からいえば私は、羽入氏が批判しているのはヴェーバーならぬ「張子のヴェーバー」であると考え。羽入氏は、ヴェーバーがそのように主張するのであれば、文献的知識はこれほどでなければならぬし、資料的根拠もこれこれではなければならない。ヴェーバーはその水準を満たしていない、資料的根拠も欠けていると批判しているのである。しかし、それは本当に必要な知識なのか、不可欠の資料なのか。羽入氏の批判で「張子のヴェーバー」はズダズダにされて見る影もないが、現実のヴェーバーの傷は殊の外少ない。羽入氏が指摘するように、確かにヴェーバーには思い違いや過失もあるが、それはとても致命傷といえるものではないのである。むしろ、羽入氏が発見した文献的諸事実は、

ヴェーバーの議論を補強するものとさえ私には思われる。こういえば、私は羽入氏に勝る超のついた「ヴェーバー病」患者ではないかといふがられる心配があるが、その最終的な診断は賢明な読者に委ねるとして、私の言い分をお聞きいただくことにしたい⁽⁴⁾。

二

「ヴェーバー病」経験者としていえば、実は私もヴェーバーの論述に注文を付けたいことはいくらかでもある。ヴェーバーの論述はさっと読むと鮮明な印象を受けるが、一歩立ち止まると迷宮に入った状態になる。歴史研究の方法として見ると、ドキュメンテーションのやり方がメチャクチャな印象を与える。通説の理解、研究史の抑え方、一次文献の読み方、これらの通常の手続きをまったく無視して、自分の議論を展開しているともいえる。大塚教授もヴェーバーは難しいとよく顔をしかめておられた。迷路に入った折、大塚教授に、「ヴェーバーのこの論文は、現在どこかの大学に博士論文として提出しても、審査で通らないのではないですか。」などといって、笑いを誘ったこともあった。そうした読解が困難なヴェーバーを分かった積もりになってはいけないし、ましてや崇拜するのはいけないというのであれば、私もその通りだと思う。しかし、事実に照らしてみると、そこにある真実、深い洞察が含まれているとしたらどうなのか。

ヴェーバーの立場からいえば、この論文はまったく新しい問題の次元を開拓しているのである。「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という問題設定は、今日の学問分野でいえば、キリスト教史、経済史、宗教社会学、思想史など、多分野にまたがっており、どれか一つの学問的規律の下においたのでは意味をなさない。一つの学問の常識を打ち破ったところで主張がなされている。ヴェーバーの方法には、歴史家も不愉快であるし、宗教学者も不愉快、経済学者も不愉快であるとの反応が目に見えが、面白いことに、歴史家のなかにも、宗教学者のなかにも、経済学者のなかにも共鳴者が現れる。だから、ヴェーバーの主張には何かしら重要なことがある、そう考えるのも不自然ではないのである⁽⁵⁾。

とはいえ、羽入氏に限らず、ヴェーバーは学問のイロハのイを踏まえていないと批判する学徒は後を絶たないのだが、そこでしばしば嘲笑をもって指摘されるのは、ヴェーバーの二次文献の使い方である。つまり、ヴェーバーは第一次資料を丹念に検討していないという以前に、二次文献から得られた判断を決定的なものとし、それでもって複雑な事実を割り切っているというのである。たとえば、ジョン・ウェズリーを通してヴェーバーを批判した岸田紀氏は、ヴェーバーが自己の論題にとって決定的に重視する文献が、情報提供者からたまたま届けられた資料にもとづくものであったことを指摘している。ウェズリー研究者の常識では、ウェズリーのその文章が彼の著作全体との関連なしに、あるいは従来のウェズリー研究への参照なしに評価されることは信じがたいことなのである⁽⁶⁾。

それに、羽入氏に先立って、ヴェーバーのフランクリン論に疑問を呈した斉藤光氏は、ヴェーバーの『フランクリン自伝』からの引用が、キュルンベルガーという二次文献からのものであること、しかもヴェーバーが目にするフランクリンの聖書からの引用を、注意深く取り扱っていないと指摘している。フランクリンの引用する「箴言」とは、22章29節「あなたはその業（Beruf）に巧みなひとを見るか、そのような人は王の前に立つ」（大塚訳）だが、斉藤氏はこの前半の重要部分は、フランクリンの自伝では“a Man diligent in his calling”となっているにも拘わらず、ヴェーバーの独文では、“einen Mann rüstig in seinem Beruf”としている。つまり、ヴェーバーにとっては、フランクリンの原文のdiligentの方が都合の良いはずなのに、それに気が付かなかただけでなく、軽率にも rüstig からの連想で「職業上の有能さ」Tüchtigkeit というフランクリンの性格を導き出しているというのである⁽⁷⁾。

これを受けて羽入氏は、この部分はさらに注意すべき問題を提起していると考える。ヴェーバーは、この部分を根拠としてフランクリンの職業義務の思想を指摘し、世俗的職業を神の召命と捉えるこの独特の思想が、宗教改革に由来すると捉えた。つまり、プロテスタント諸国では、ドイツ語のBeruf、英語のcallingなど、一つの言葉で、職業と召命とを二重に意味する独特の言葉がある。これは聖書の翻訳と関係がある。つまり、プロテスタンティズムは聖書を民衆に読めるように自国語訳を積極的に進めたが、その過程で職業＝召命思想が生まれたと考えたのである。フランクリンが引用した先の箴言の章句では、calling が用いられ、ヴェーバーはそれをキュルンベルガーに従ってBeruf と訳していた。

そうであるとすれば、この箴言の章句は見事にヴェーバーの構想を支持しているように見えるが、しかし実はとんでもない問題が孕まれているというのが羽入氏の指摘である。というのは、フランクリンは確かにcallingと言う言葉を使用しているが、その箇所は欽定訳聖書ではbusinessという純然たる世俗的職業を意味する言葉が使用されている。しかもそれだけではない。この箇所のルターのドイツ語訳自身でも、Berufは用いられず、やはり世俗的職業を意味するGeschäftが用いられている。すなわち、職業義務の思想の手がかりである筈のフランクリンの引用する聖書の章句は、英訳聖書でも独訳聖書でも、職業＝召命思想を示すものではないということになるのである⁽⁸⁾。

これをヴェーバーにもっとも辛辣な受け止め方をすれば、ヴェーバーはフランクリンの章句を独訳で読むことによってBeruf概念に思い至り、英訳聖書を確認しないことでcallingと関係させ、テキストに基づかない職業＝召命思想を提起してしまったということになる。こんなやり方を平気でするようでは、研究者としてとても問題するに足りないという結論が導かれる。したがって、ここにヴェーバーの「知的誠実性」は崩壊し、一件落着きといってもよさそうなものだが、実は問題はそう簡単ではない。というのは、実は以上の事実をヴェーバーは知らなかったわけではないし、逆にヴェーバー自身がはっきりと注記しているからである⁽⁹⁾。

この事実をどう判断するかで、ヴェーバー評価が180度変わってくる。ヴェーバーはこの一見矛

盾する事実にもかかわらず、職業 = 召命概念が聖書翻訳に由来することを論証している奥深い学者というべきなのか、それともヴェーバーはどんな矛盾にも平気な厚顔な空虚な巨人というべきなのか。羽入氏が後者の判断を支持することは言うまでも無いが、私は前者の判断を支持する。その根拠を次に説明しよう。

三

まず出発点に戻って、ヴェーバーによる職業義務の思想と聖書翻訳との関係に関する説明をおさらいしておくことにしよう。ヴェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を問題とするとき手がかりとしたのが、職業義務の思想であり、プロテスタントの国々に、世俗的職業と宗教的使命、召命を同時に意味する言葉があるという事実であった。ドイツ語のベルーフ Beruf、英語のコーリング calling がそれである。したがって、私のベルーフあるいはコーリングは靴屋ですという場合、私の職業は靴屋ですという意味と、私の召命、私の宗教的使命は靴屋ですという二重の意味が表現されることになる。このような意味をもつ言葉は、古典古代にも、カトリック圏でも存在しない、プロテスタント特有の表現であるというわけである。羽入氏の批判の意味をよく理解するために述べると、羽入氏はヴェーバーの指摘するこの事実は否定していない。つまり、ベルーフやコーリングは、職業と召命とを同時に意味する言葉であること、それはプロテスタンティズムと関係があるようだということは否定しようとはしていないのである⁽¹⁰⁾。

羽入氏が疑問符を突きつけるのは、ヴェーバーがこの職業 = 召命思想を、聖書翻訳と関係させて論証するそのやり方なのである。すなわち、ヴェーバーは聖書翻訳に従事した宗教改革者は、本来はまったく異なった二つの概念を、その一つの言葉で翻訳したという。具体的にはルターの翻訳を取り上げているのだが、使徒パウロの手紙がしばしば語る「神によって永遠の救いに召される」意味で、したがって純然たる宗教的な召命を意味する言葉を Beruf を用いて訳す一方、他方で、「ベン・シラの知恵」で純然たる世俗的職業を意味する言葉をやはり Beruf と訳している。つまり、聖書の原文では、別個の二つの言葉が、宗教改革者によって一つの言葉で翻訳されたことにより、職業 = 召命概念が生まれた、こうヴェーバーは述べた。

これに対して、羽入氏は宗教改革期の各種の聖書翻訳を考証するなかから、驚くべき事実を発見した。ヴェーバーがとくに重視する「コリント人への第一の手紙」(「コリント」 と略) 7章20節は、ルター生前の訳文では Beruf とは訳されていないことである。ではどのように訳されていたかといえば、羽入氏によればこうである。

“ Ein Jglicher bleibe in dem Ruf, darinnen er berufen ist. ”

ヴェーバーが根拠として挙げる独訳、これはルター生前の訳ではなく、その後の現代文への校訂の過程でなされた訳文だと羽入氏はいうのだが、それはこうである。

“ Ein jeglicher bleibe in dem Beruf, in dem er berufen ist. ”⁽¹¹⁾

見られるように羽入氏は、ヴェーバーは Beruf を用いているというが、ルター訳は正確には Ruf が用いられているという。羽入氏は繰り返しこの箇所について、Beruf は用いられていないというのだが、別にいえば Ruf が用いられているのである。私はドイツ語学にはまったく素人だが、ドイツ語の動詞 rufen は英語の call に相当する、とすればその名詞形 Ruf は、calling に相当するといえる。では、rufen と berufen の相違はどうかといえば、前者が「呼ぶ」「召す」という意味であるのに、後者の方が、より限定されて「職務に付ける」「任用する」という意味をもつ。Ruf が Beruf に置きかえられていったのであれば、単なる「召命」ではなく「職業」の意味合いをはっきりと帯びるようになって行くことと並行していたと考えられる。

羽入氏は既述のように、ルターがフランクリンの引用した箴言の箇所を Beruf とは訳していなかったことを指摘していた。ただし、「ベン・シラの知恵」では、世俗的職業を意味する言葉を Beruf と訳していた。したがって、ルターの翻訳では、世俗的職務を意味する Geschäft と「ベン・シラの知恵」での Beruf、それに「コリント」での Ruf があり、その Ruf には berufen という動詞が使われていた。この関連で羽入氏が指摘するように、ヴェーバーにはいくつかの思い違いがあったようである。「コリント」の翻訳語の検討から、ルターが、Ruf と Beruf の間を揺れ動いていると判断するには根拠が乏しいし、「箴言」と「ベン・シラの知恵」との訳語の相違も、ヴェーバーがいうように、ルターの精神的境地の変化として説明できるかといえば、その根拠も疑わしい。

しかし、だからといって職業 = 召命思想が、ルターの聖書翻訳と関係しているというヴェーバーの最初の判断が覆るかといえば、実はそうでもないのである。ルターの聖書翻訳では、世俗的職業が Beruf と訳されている事実は確かであるし、宗教的召命を意味する部分が Ruf とされてはいるが、それと関係して berufen という動詞は用いられているから、当時の一般的な用法として Beruf と Ruf とが流動的な関係にあったと仮定すればなんら問題はないことになる。事実、ヴェーバーが指摘し、羽入氏も言及しているように、ルターの周辺にいた宗教改革者の手になる「アウグスブルク信仰告白」では、「コリント」7章20節の表現を想起させる文章で Beruf が用いられているのである。とすれば、宗教的召命の文脈で用いられた言葉は Beruf ではなく Ruf であり、Beruf との関連は付けられないという羽入氏の指摘は、ルターの周辺を含めて考えると問題にならない。しかも、羽入氏が注意を促しているように⁽¹²⁾、ヴェーバーが目にしたのは、単数の聖書翻訳者ではなく、翻訳者たちであるとすればまったく問題は無いことになる。

四

羽入氏が批判したのは、ヴェーバーではなく「張子のヴェーバー」であったというのはこうである。ヴェーバーが言うように、ベルーフ概念がルターの聖書翻訳に由来するというのであれば、ル

ターの聖書翻訳では、宗教的召命を示す言葉と世俗的職業を示す言葉がともに、ベルーフと訳されている筈である。つまり、ヴェーバーの論法からすれば、ルターは首尾一貫して職業 = 召命を意味するベルーフを訳語として用いていることが必要ではないか。こうした想定が、羽入氏の批判の前提としてある。これが羽入氏が標的とした「張子のヴェーバー」である。すなわち、羽入氏は、「張子のヴェーバー」に向かって、ルターの新約聖書翻訳は混乱しており、ルターの前版では、「箴言」の世俗的職業を示す言葉は世俗的職業を示す言葉で、宗教的召命は召命を意味する言葉で訳され、辛うじて、「ベン・シラの知恵」のみが、ベルーフと訳されているに過ぎないと批判したのである。とくに、「コリント」の箇所については、ヴェーバーは、Ruf が用いられているのを知りつつ、新しい版での Beruf を根拠としており、宗教改革者の聖書翻訳から抜き起こす自分自身の説明を自分自身が裏切っていると批判したのであった。

だが、私は、羽入氏とは違って、ルターにおけるベルーフという訳語の混乱ないしは首尾一貫性の欠如が、ヴェーバーの解釈、すなわち職業 = 召命概念が聖書翻訳に由来するという判断と矛盾するとは考えない。むしろ、ルターの前版の欠如、さらにはベルーフに相当するコーリングの英訳聖書における使用法の首尾一貫性の欠如は、逆に、ヴェーバーの判断を強化するのではないかと考える。羽入氏は繰り返し、ヴェーバーのテキストとルターをはじめ宗教改革者の聖書翻訳のテキストは矛盾するというのだが、ルターの前版が指示する現実を念頭におくとき、その矛盾は解消するというよりも現実をよく映し出し、ヴェーバーのテキストを支持するものとなる。それはこうである。

実は私自身ヴェーバーのルターの前版の聖書翻訳と職業 = 召命概念の成立の説明には、ある疑問をもっていた。ヴェーバーが言うように、ルターが、聖書の原語ではそれぞれ別個の言葉を同じ Beruf と訳出したとして、それを讀んだ民衆は、どうしてそれが二重の意味と分かったであろうか、という疑問である。原語を知らないとすれば、それが召命、任命あるいは職務として受け取ることがあっても、世俗的職業と重ねて理解することは容易ではなかったのではあるまいか。「ベン・シラの知恵」の部分には、原語としては明らかに世俗的職業を意味し、聖書の章句の文脈上そう理解することが出来るとしても、ルターがそれを Beruf と訳したからといって、直ちに職業 = 召命と理解することは困難だったのではあるまいか。

これに対する私の暫定的な判断は、おそらくルター以前に敬虔な民衆の中で、職業を召命として受け取り生活する人々がいたのではないかと、はっきりと意識されてはなかったとしても、ルターの前版のベルーフの用法を事実上準備するような社会思想があったのではないかとということである。事実ヴェーバーも、ルターの前版として、ドイツの神秘家タウラーとイギリスのウィクリフの例を挙げている。タウラーは Ruf を世俗的職業の意味で用いているし、ウィクリフも calling に相当する古い英語を用いているというのである。ルターの前版に先立ってそうした社会的な背景があったとすれば、ルターの手探りの訳語の選択の理由も理解できるし、翻訳を通じて次第に明確な表現が与えら

れ、広く受け入れられていったことも無理なく想定できるのである。

こう判断してよいとすれば、羽入氏が指摘するルターの聖書翻訳のテキストも、逆にヴェーバーにとっては有利な材料となる。もしも、ヴェーバーが、ルターは二重の語義をもつベルーフ概念を無から創造した主張していると解釈すれば、確かにルターには混乱があり、ヴェーバーは混乱が無いかのように事実を曲げて伝えていると批判できるかも知れない。そうではなく、宗教改革の前史から、宗教改革を準備する運動が民衆の中にあり、そのなかでベルーフ概念の萌芽が見られ、ルターをはじめとする改革者たちはそれを受け継ぎつつ、聖書翻訳の過程で徐々に明確な表現を与えていったと解することが出来るのである。ヴェーバーはそのよう意味で、ベルーフ概念は聖書翻訳に由来すると語っていると解釈すれば、むしろ、羽入氏が発見したルターの聖書翻訳における Beruf 概念の流動的な取り扱いそれ自身が、ヴェーバーにとって有利に働くのである。

五

ヴェーバーの calling 概念に関する羽入氏の告発にも、同じような理由で反駁することができる。羽入氏は、英訳聖書では先にルターが Beruf の訳語を用いた「ベン・シラの知恵」の章句では、calling の訳語は用いられていないという。ヴェーバーが参照しているのは「コリント」7章20節の章句であり、それはもともと召命を意味する箇所であるから、calling が用いられているとしても、その二重の語義を検証するには不十分である、というわけである。確かに、ヴェーバーが当該箇所で挙げている calling の用例は羽入氏の指摘の通りであるが、では英語の calling に世俗的職業の意味が無いからといってそうではない。羽入氏もそのことを問題としてはいない。羽入氏が問題としているのは、ピューリタンの職業=召命概念が「クランマーの聖書翻訳」に起源があるかどうかという点であり、ヴェーバーが O E D (オクスフォード英語大辞典) の編纂者マレーを持ち出してそう判断しているのは根拠がないということである¹³⁾。

したがってこの箇所の羽入氏の批判は、ヴェーバーは calling に関する英訳聖書の用例を十分に挙げていないという点にある。しかし、ここで問題にされているヴェーバーの論述はルターの聖書翻訳に関する長大な注の末尾で、いわば附論として置かれたパラグラフであって、十全な説明を求めること自体が無理な注文といわなければならない。それはともかく羽入氏は、calling が職業の意味を含むことには異議を差し挟むことなく、ヴェーバーは二次文献で問題を片付けている点に批判を向けている。羽入氏が、ヴェーバーが参照し、議論の大筋を作り上げたに違いないと睨むのは、O E D、正確にはその前身の辞書なのだが、そこで説明されている calling の語義の推移過程は大変興味深いので、羽入氏の整理にしたがって、そのまま引用することにしよう。

「神からの呼びかけ」という“calling”の元々の意味と、「人が救いへと召された時にいた状態」という「コリント」7・20に由来する意味とが混同された結果、「神が人をそれへと召したとこ

るのこの世における状態」という第三の語義が派生し、そして「そこから」「日常の仕事、生計の手段、職業、そして trade」といった「世俗的職業」を意味する“calling”の第四の語義が発生してきたのである⁽¹⁴⁾。

この説明は、calling の訳語を含む、「コリント」7章20節の解釈の流れとしても受け取ることも出来よう。もとより、それがその他の聖書の箇所との翻訳とどう関連するのか、ルターの翻訳の影響はどのように検証できるのかなど、確定することが困難な問題があるとしても、ヴェーバーの職業=召命概念はプロテスタンティズム、とくに聖書翻訳のなかで発生したことを支持する十分な内容というべきではあるまいか。羽入氏はヴェーバーがその辞書の項目という二次的資料に依存して一次文献を十分見ていないこと、また「ジュネーブ聖書」を取り違えるなど、明らかなミスがあるとしているが、しかしそれはミスであったとしても、事実の捏造であったり詐術であったりするわけではない。そもそも、ヴェーバーにはそうする動機が無いからである。ヴェーバーにとって重要な事実は、バルーフもコーリングも職業=召命概念を含むこと、その語義は宗教改革と、とくに聖書の自国語訳のなかで確定していったことであり、羽入氏の研究はむしろそれを強化するものと解することができるのである。

六

羽入氏のこの本は、後半はヴェーバーのベンジャミン・フランクリン解釈を取り上げ、ヴェーバー批判を更に展開している。だが、私にはその批判も、ヴェーバーのテキストとフランクリンのテキストのみを取り上げ、現実のフランクリンを見ていないことからくる欠陥を含んでいるように思える。羽入氏が取り上げる問題点の一つは、フランクリンとキリスト教信仰との関連である。羽入氏は一方で、ヴェーバーはフランクリンが自己の生き方を「神の啓示」に帰していると述べているが、フランクリンのテキストはそれを否定しているといい⁽¹⁵⁾、他方では、ヴェーバーはフランクリンを「宗教的なものとの直接の関係をまったく失っている」と述べているが、それはフランクリンを引用するにあたって宗教的な関係を恣意的に切り取ったからだとして批判している⁽¹⁶⁾。つまり、ヴェーバーのテキストは、フランクリンを「神の啓示」に従う敬虔な人物と描いているが、それは間違いであり、他方で宗教との関係を無視しているが、それも間違いだと述べている。

確かに、羽入氏が指摘するようにフランクリンのテキストは、フランクリンが一面で神の啓示を否定し、他面で「宗教的なものへの直接的な言及」を含んでいることを示している。フランクリンはピューリタンの啓示宗教とは、両義的な関係にあるのである。羽入氏はヴェーバーのテキストはフランクリンのテキストと二重に矛盾するというのだが、それはフランクリン自身が矛盾であるからに他ならない。すなわち、合理的神、理性宗教に傾斜していることは確かなのだが、それが伝統的なキリスト教理解から離反するないし逸脱しているかといえ、必ずしもそうではないので

ある。当時の人々がフランクリンの人生観を非キリスト教とも反キリスト教とも考えなかったのは確かなのである。

この点は、たとえばフランクリンが記す有名な自伝のエピソード、十三徳の樹立で考えてみると分かりやすい。彼が若い日に道徳的完成に到達したいと思ひ立ち、主要な徳目十三を挙げて、一つ一つ順序を経て身につけていったという話である⁽¹⁷⁾。ここでフランクリンは徳目が必要な理由を、功利的に説明し直接神に由来するものとは考えていない。その意味では、宗教との直接の関係は無い。しかしそうした方法的な生活態度自体は、ピューリタンの生活形成、自己審査の方法を継承している。ピューリタンたちは、日々自己の生活を点検して、聖徒に相応しい心と行動の修得に努めていたからである。したがって、フランクリンの生活態度は、聖書を根拠としていないことに注目すれば宗教との関係を欠いているし、他方、ピューリタンの禁欲を継承しているから、ピューリタンの文化の枠内にいるともいえるのである。

フランクリンについて羽入氏が問題としている第二の点は、ヴェーバーの次のような記述である。フランクリンの倫理の『『最高善』』とは、あらゆる無邪気な享楽を厳しく避けて、金を、さらに沢山の金を儲けることなのであり、余りにもすべての幸福主義的、いやそれどころか快樂主義的の観点を取り去られており、純粹に自己目的と考えられているために、個々人の『幸福』や『利益』に対してはとにかくまったく超越したもので、およそ非合理的なものとして立ち現れてくるほどなのである」という記述である。これに対して羽入氏は、フランクリンの「勤勉を富と名声を得るための手段とみなすようになった」という章句を対立させ、この部分もまたヴェーバーが自分に不都合であることから引用を回避した箇所であるとしている⁽¹⁸⁾。

確かに、ヴェーバーの性格付けはかなり極端だが、フランクリンにおいて致富が自己目的とされていることは、「富への道」といったパンフレットの題名によく現されているし、それが単なる幸福や快樂の追求ではなかったことは、それを獲得する方法的な生活態度それ自体が、意味あるものとして評価されていることに現れている。つまり、時間の規律、行動の規律は、有益な結果を導くと想定されている限りでは、幸福追求といってもよいが、他面そうした行動様式それ自体は、衝動的な快樂追求、幸福追求を否定したところに成立していることに注目しなければならない。一分の無駄も無く効率的に働き高収入を得ているビジネスマンの幸福が、ヴァカンスで南の島々に赴きのんびりと過ごすことだとすれば、そこには幸福の倒錯があるともいえる。ヴェーバーは、そうしたビジネスマンの原点に、フランクリンの生活様式を見出したから、上記のような表現になったのである。ヴェーバーのテキストとフランクリンのテキストとの照合だけであれば一見矛盾するように写るが、現実を想定すれば、決して矛盾ではないのである。

七

最後に一言。本来の主題から離れていえば、本書はすこぶる面白い書物である。西欧の学問の巨人ヴェーバーに対して、日本の若武者が堂々と戦いを挑んでいる趣がある。相手の巨人は、かつては若武者が私淑した学的英雄でもあった。若武者はいまなおその魅力、魔力に惹かれつつ、しかし、納得できないことは納得できないとして、あくまでも正義の戦いを挑んでいる。若武者は巨人を仕留め、メッタ突きにして、勝鬨さえも挙げている。しかし、残念ながら評者の下した判定は、八つ裂きにされているのは「張子のヴェーバー」であって、ヴェーバー自身の傷は浅いというものであった。ヴェーバーのテキストとヴェーバーの引用するテキストの間には、確かに、一部に間違いがあり、思い違いがあり、不注意なミスもあった。しかし、著者が重視する基本的な論点に関する限り、一見矛盾するよう見えて、それぞれのテキストが指し示す現実を注意深く凝視するとき、疑問は氷解するのである。無論、だからといってヴェーバーの論証が完璧だということではないし、羽入氏の文献考証が無意味であったというのでもない。羽入氏の研究は、ヴェーバー批判という枠組みから離れて、「聖書翻訳と職業義務の思想の成立」という主題で纏められるのであれば、大きな学問的寄与となるであろう。

本書には、二人の対照的なヴェーバーがいる。一人は、研究の基準を与えている学問的方法論者ヴェーバーであり、もう一人は、知的誠実を欠き「詐欺師」とさえいわれる無残なヴェーバーである。羽入氏にとって、この二人のヴェーバーはともに真実であり、本書には著者がそれぞれと格闘したドラマ、著者の引き裂かれた内面のドラマが展開されているのである。しかし、これはなにやら見慣れた光景といえるかも知れない。西洋の思想に惹かれつつ、他面で西洋の思想の不愉快な現実に触れ、理想の西洋と不義の西洋との距離の大きさに憤慨するという光景は、近代日本の洋学者がしばしば経験してきたことではあるまいか。羽入氏の本書は、そうした思想的構図を劇画的に鮮明に描き出しているところがある。

このアポリアはどのように解決できるのか。そう問題を展開させたとき、私がやはり学生時代に接した哲学者森有正氏の次のような言葉が思い浮かんだ。パスカルから学ぼうとしても、パスカルは何も教えてくれない、という発言である。何やら謎の言葉だが、森氏はパスカルが提起する問題を、パスカルから離れて、自分の経験の中で考えないと、パスカルの語ることが理解できないと指摘しているのである。ヴェーバーから学ぼうとしても、ヴェーバーは何も教えてくれない。ヴェーバーの提起している問題を、ヴェーバーから離れて、自分自身の経験の中で考えることがないと理解できないのである。ルターの聖書翻訳にしても、フランクリンのテキストにしても、やはり、一度ヴェーバーから離れて、自分自身の経験の中で現実を考えて始めて、ヴェーバーとの距離が出来、ヴェーバーのいうことが見えて来るのではあるまいか。

注

- (1) 羽入辰郎『マックス・ヴェーバーの犯罪 『倫理』論文における資料操作の詐術と「知的誠実性」の崩壊』(ミネルヴァ書房, 2002年)
- (2) 梅津順一『近代経済人の宗教的根源 ヴェーバー・バクスター・スミス』(みすず書房, 1989年)なお、この研究は、一面では、越智武臣『近代英国の起源』(ミネルヴァ書房, 1966年)で展開された、バクスターにもとづくヴェーバー批判への反論という意味をもつ。今関恒夫『ピューリタニズムと近代社会』(みすず書房, 1988年)も、社会史的な研究視角から、ヴェーバーのバクスター論を裏付けている。
- (3) 羽入『前掲書』p.5, 9~10。
- (4) なお、以下で私は羽入氏の解釈に反論することになるが、羽入氏の挙げる証拠については争わないことにする。その文献的知識自体を再検証することは私の手に余るし、羽入氏の研究態度は十分信頼するに足ると考えるからに他ならない。それでもヴェーバーの立論は支持できるというのが私の立場である。
- (5) ヴェーバー・テーゼ論争については、梅津『前掲書』第一章を参照。この論争は相変わらず続いており、近年の批判として、椎名重明『プロテスタンティズムと資本主義』東大出版会, 1996年があり、梅津順一「ヴェーバー・テーゼとピューリタニズム再論」(深井智朗・F.W. グラフ編著『ヴェーバー・トレルチ・イエリネック』聖学院大学出版会, 2001年所収)には、それを含めた近年の内外の文献へのコメントがある。
- (6) 岸田紀『ジョン・ウェズリ研究』(ミネルヴァ書房, 1977年)。なお、岸田氏の挙げる具体的なヴェーバー批判については、梅津順一『前掲書』で批判的にコメントしておいた。(p.291~293)
- (7) 斉藤光「フランクリンとマックス・ヴェーバー」、『明星英米文学』第2号, 1987年, p.74以下。
- (8) 羽入『前掲書』p.68以下。
- (9) ヴェーバーは、フランクリンが calling と引用した箇所である「箴言」22章29節では、「ルター訳では in seinem Geschäft, 旧英訳聖書では business となっている。」と明記している。大塚訳 p.34。
- (10) 羽入氏の論法は、ヴェーバーの論拠が怪しい、薄弱だということを繰り返しているから、私がこのように羽入批判を読み取るのは、意外な印象を与えるかも知れない。しかし、後に触れるように、羽入氏は、ヴェーバーが calling に関する辞書の説明で、自分の議論を組み立てたと批判してはいるのだが、その辞書が示唆すること、つまり calling を根拠とする召命 = 職業論には反証しようとしていない。反証するのであれば、その辞書の語義の説明自体を批判しなければならなかったであろう。
- (11) 羽入『前掲書』p.77以下。このルターの訳文は、1523年の注解書のものである。
- (12) 羽入『前掲書』p.68。
- (13) 羽入『前掲書』p.45以下。
- (14) 羽入『前掲書』p.47。
- (15) 羽入『前掲書』第3章, 第2節, 第3節。
- (16) 羽入『前掲書』第4章, 第4節。
- (17) フランクリン, 西川正身・松本慎一訳『フランクリン自伝』(岩波文庫, 1957年), p.116以下。
- (18) 羽入『前掲書』p.181。